

外国にルーツのある子どもの育ちをめぐる現状と課題

—妊娠・出産から小学校入学まで—

Current Situation and Issues on the Upbringing of Children with Foreign Backgrounds: From Pregnancy and Childbirth to Elementary School Entrance

小林 和美 (大阪教育大学)

KOBAYASHI Kazumi (Osaka Kyoiku University)

kazumik@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

1 本報告の課題

豊岡市における外国にルーツのある就学前児童数は、同年代人口の約 1.5%を占めている(2021年6月末現在)。本報告では、外国人住民の非集住地域である豊岡市を研究対象とし、妊娠・出産から小学校入学までの、外国にルーツのある子どもの育ちをめぐる現状と課題について検討する。そのさい、日本では子育ての負担が母親に集中しているというアジア諸社会の比較研究(落合・山根・宮坂 2007 など)の知見をふまえ、外国人女性の妊娠・出産・育児の経験を、子育てに関わる社会的ネットワークの違いという観点からも捉えていきたい。

2 外国人妊産婦・子育て家庭への支援の現状と課題

2017年度から2019年度にかけて、豊岡市における外国にルーツのある妊婦に対する母子健康手帳交付数は、年間4、5件(豊岡市内で出生する子どもの1%弱)であったが、2020年度には11件(2%強)に増加した。外国人同士の夫婦のケースが増えている。

豊岡市の健康増進課では、2017年度より「おやこ支援室」が立ち上げられ、子育て支援に力を入れている。「おやこ支援室」では、子育て世代包括支援センターに専任保健師が配置され、妊娠期からの切れ目ない支援が目指されている。外国籍の市民に対しても、日本国籍者と同様の制度的支援が行われている。ただし、転出入の把握が難しいため、日本語がわからない母親とその子どもの全体像は把握できていない。また、近年は、若年、低所得、支援者がいないなどの理由のために、虐待が起こる可能性を考慮した予防的な支援を妊娠期からしなければならぬケースが増えている。

現場で支援にあたっている保健師・栄養士らからは、(1)転出入の把握が難しい、(2)支援者側からの介入が難しい、(3)支援ニーズの把握が難しい、(4)意思疎通が難しい、(5)情報が届いているのか心配、(6)身内の支援者が少ない、孤立しやすい、(7)文化の違いについての理解が必要、(8)発達の見定めが難しい、(9)経験の蓄積・共有に課題がある、など、たくさんの困り事や課題があげられた。

3 就学前施設における現状と課題

豊岡に暮らす外国にルーツのある就学前児童の8割強は日本国籍で、国際結婚家庭の子どもたち(多くは父親が豊岡出身)が多数を占めていたが、「両親ともに外国人で、日本語がまったくできない子どもが、急に入園してくる」ということが、めずらしくなくなりつつ

あるという。外国にルーツのある子どもたちの居住地は、地域的に偏在しているが、特定の就学前施設への集中はみられない。市内の39施設中14施設で外国にルーツのある園児の在籍を確認したが、そのほとんどが1人または2人の在籍で、3人在籍と4人在籍が1か所ずつであった。

「生活の場」である保育園・子ども園では、園児の入園前の状況や生活環境・生活文化の把握および理解が課題としてあげられた。また、日本語がわからない子どもへの支援、多言語環境にある子どもの言葉の発達、保護者との意思疎通、子どもの家庭の状況についても、困り事や課題、要望などがあげられた。

4 外国人住民の声

外国出身の女性たちの妊娠・出産・育児は、近くに支援してくれる家族・親族が少なく、孤立しやすい状況のなかでおこなわれる傾向がある。さらに、フィリピン、中国、ベトナムなどのアジア諸国出身の母親の場合、育児ネットワークが豊かで、家族や親戚みんなで子どもを育て、子どものふるまいに寛容な母国に対し、母親に負担が集中しがちで何かと周囲に気を遣う日本という育児環境の差異も、彼女たちの負担感や孤立感を深めている。

母子手帳の交付や妊婦健診・乳幼児健診、出産費用の医療費控除、保健師・栄養士らによる指導、救急医療などの制度的支援は整っていると受け止められており、安心感を与えているようである。行政手続きや病院、予防接種などでは、フィリピン、ベトナムなど、漢字を使わない地域の出身者に困っている人が多かった。就学前施設（保育園・認定こども園）については、生活習慣の指導をしてもらえることが肯定的に語られる一方で、子どもを預けることや育児の担い手に対する考え方の違い、自由度の少ないスケジュールや集団行動などへの戸惑いや、読み書きの大変さとそれへの対処などについても語られた。

外国出身の女性たちは、妊娠・出産・育児の過程で、数多くの文化や習慣の違いを感じていた。また、子どもの言葉の問題で悩んだり、つらい経験をしたりした人もいた。

5 まとめ

豊岡市に居住する外国にルーツのある子どもは、これまでは父親が豊岡出身である国際結婚家庭の子どもが多かったが、両親ともに外国人である家庭の子どもが増えつつある。それにともない、抱える課題も、外国人集住地域と共通するものが増えつつある。外国にルーツのある子どもの育ちへの支援は、個別対応の段階から仕組みづくりの段階へ移りつつある。また、妊娠・出産・育児経験についての外国人女性たちの語りから、出身地との間の子育てに関わる社会的ネットワークの差異から母親の孤立感・負担感が増している部分があることがわかった。日本の育児ネットワークの相対的貧しさを視野に入れた支援を考えていく必要がある。

おもな参考文献

落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編 2007 『アジアの家族とジェンダー』 勁草書房

荒牧重人ら編 2022 『外国人の子ども白書【第2版】』 明石書店

渡邊洋子 2018 「在日外国人小児・家族への母子保健サービスの現状」『チャイルドヘルス』

21(1)、17-20